

文5
4862
8



本朝諸士百家記目錄

前集



伊勢三

卷之八

ひきのをもどき
武益國若房至く亟短も、乃事

ね森園をもあらぬ
角川承りそびのゆ

鶴多喜の下みれゆ

同輩の鶴高をもあらぬ云ふゆと審也と墨

ね森園をもあらぬまゝ鶴の首とぞく

同輩の鶴高をもあらぬやへ込まふとぞくされ事

追ふれ候人ゆめとぞく

法士方全教主人あれぬわけのゆ

日本詩古文書ノ目録
大坂ノ町乃萬葉と曰通世者乃事

美濃堂之亂事ニモ経済の事
至織よ人と忍りを殺めの事

園食名をう仕合の事

丹羽二階堂之條す即教討之事

村恩弟力本多源の族対あく強川崎

武井沐みくに於に人をあひの事

吉田雲連鷺の事

教宗を表美と云と爲す

越房彰こう身を刀の事

本朝諸士百家記卷之八

前集

元房事ノ經緯の事

家能順圓めす角ぬふと通金より國別へりよ
牛糞糞出るて度差野としゆけの通金より又里小
みあらう國中よひかく種文山の事れ爲ぞ勢
勇者のいわく立たうどく自がまもひとそへ生
ひよれどとあくよはる事圓としゆく墨差よ納理
つうよまこととく付せば二十耶武門可と案も
うどくあれとあくよはる事圓とびくのれ房主を西
としゆくの事。七丈十尺をよりひと付みとだひよ東
ひよの妹背れ中のあらくよもとたぐひあひ中の

えをぬき自らもあらのねの鳴
親赤毛多きと数傷タリとてやさしあはり事
からまくわくわくもとまこと廢めとほくねのれわ
らひとと嘗絶ひのうる御く御く経入ゆすより候
おもむくもれよ醫者とやそぞとゆく病氣とあ
とどりてそりがも被事の色見ててままで坐もうれ
みよひ登病氣のあよんと近うねねとれ
くくれひきなばうめうをも中く養ま
思うとくとあめぞううひ病が後もとくと
おカくじとれう生じう病もあきが暮れの
さんじう方便とあひく爲へとぞてばるよづひ
とそく夕方ばかり至る月十日あまり病氣を用ひ

もくの毫毛もとどりく病ぬあみだに着せ
くよび野梅枝を取れわからく病のつまうぐ
とくい裏ももえんじうやうよみをれわとび挿下
ともかく下されとあよひ尾角を薦とて平地の
あくのあくはよまうくのくや村えうくそりあく
中弓中弓アリとくとくたま被毛と十全神産經
立つ角川(どうぐわ)自終まこととせんじく
翁め及ば國機のあうとてひをすりをあらう
もとげとくとくとてひをすりとまの病をあらう
もとと離々とくとくとてひをすりとまの病をあらう
れ翁もとび翁よ入くの徳義されとてひくし翁
ゆとトテのれひくしも船のうくとてひく

みましまりくふくはらとよろこびりきの儀
あか母のひづれの法事の取とくにまよ
ゆゑを奉參すゆくみどりく興と作一そ
あぐまゆくばくらむとくとくとくとくと
わをじせうとやうとれど女房とくお坐内とく
今日をせつとくとくとくとくとくとくとくとく
おの外へとくとくとくとくとくとくとくとくとく
看ゆくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
ノとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

もやからうりとよ下候つゝとあよふとわんさ
うつされ候まうて興す。あきらむにむせば
れもありとあひり草とそがむすきうづとれ
やうとれあやあ候きやと引くに繋みよまく
ひ類縁の琴れあやひうあうと
かの船をう向く。うのどもともとからほん一千筋
せゆうをうめく。せゆうむじく
せゆうう繋の場より、うけのりうう部を
せゆうとぬりうれたの署よ。おうがう風れれう
はううりあ。とがよやうう日晴がううふとくどり
してすとがおとも親もむとて重ねうむと
男やうあわとてと見てやうねいのいと



のやうもせんべつたるやうもあ
御相手とほつ、一轍かまひて、さうもあり。こゝも
とほつめの身にまづ、税役務よれよふ角立事の姫
さうたうゆうたは、ほんが、
中ひきとて、まきとくの女房の病氣をまきのくわ
う、まくは、御おれ奴のうえとくれと女
房のうえとく、どり、まあせとく、いのうのとく、
よぬせよがまれ、すまう、
もとく、然もわくともねやひとくらもぬまくわくと
一焼かく、そひく、まくせひく、
どもく、まくせひく、
らのあくの川、林、そなまく、おとむかひくよ

もあと月あかりをしがまからん。船たへまう
つるく。あよこすとおもひてかはし飛やまとおもて
せること渭なり。タニシヨウ。船橋新玉
取の中よやんを飛さずやうかのひをうちに被
安肩れ於くうも箱ひとまきりひ取まわゆ
ひゆ。新よ渭のまわらやうとひくが船橋新玉
あはるよ。浦川ひみのとくが船橋新玉
風とあまうねまくせうを屬へわやうと鳴とあ
ざきうともどよのまく。とよもようてまと
のまつあくまつはぐとまづやく。生と角鳥
と始まうたをかてやせがれ病をまのこうりとも
めえとむの胸とさとう。まくがれとま



ト本居宣長著
文政三月
前編

あはれのまへておれど御劍のもかをも
うかばくひよねあそひ一を切ゆくとる
とうせんまを金しまのさりんもうく病しておとつま
よとすあどりもくらかまと手くぬれどのませお
駕からせるあれてゆめく車ありりわゆうぐも
わよ動せしも第一のゆくるとよほめうめ命つぐ
ゆきのゆき探すとんどの船とくろ
駕馬を遙庵と云ふとこあすと累とす
みゆきを西山櫻門のゆりやんによくねが盡のとく
駕てまくら秋あれぬわざくわざく或ハス
むらえ見事軍の洋判わづれにけりを假のうき
船橋のまくら舟とりまくらう浮せ物よもと乗せ流

御とありてはまづまづとくらべての事れをうり
下へ落つてゐるのちもすましやがゆすかひゆの事れ
書のねはあざりたりまことに丸事も重ひて、お房の
御うとくいふとくとひれられ嘆なむものにあ
樂ともぞ居たうとくはるはる卷め一巻の事處面をちと
之の卷士と一轍中のかくよかくわどりの内を
おのの歌とよきまを垂うかくわうとむゑぎりまこと
てひまくせむとともあつてよしのううさうは一巻れ
真歌のめでよしのううはいはううは一巻れ
歌ありともあらかずまづめのとれんめくとれんめく
れまくともあらかずまづめのとれんめくとれんめく
一肩舉てもよ興ト。とくに歌よがれのものから

はるかに響く歌の聲もあらんのうとどうふをもあ
野のやまととこつぶせうより歌とあべく傳
便と附よ高たま萬の扇とひく席をものと發りて
あひとあづき袖同わもと月十日のおれ番
とまよ異色れとまのひとあ四指ゆねとうら
い小弁筒と入せんともとらば櫻を人見とあれ
守あとくすあらはるがくとタキモとひくれ
往あとくすあらはるがくとタキモとひくれ
けんか一歳じきのと中からんあくひくろ
二年かうとくすが興りとあておせあくみと
多めとけくとくすが興りとあておせあくみと
れんかうとくすが興りとあておせあくみと

もとて三月の候よとあつてそれを扇あつて
まほすをうそうそと移してまほすのどとてあひ聲た
まほすとて臘月ておもやううきもがやわん
とめうまとせん御名あよ親まとだすとくをもとてあ
えんこう男矣とくかげてまうわりとむか
像まとう潤だる重一組糞子（れ）柳一枝とてあらぬ
えやうかの春（はる）とてさかとくふとんせとだりよ
きくれづく猪（いのし）とらきあく瓦（かわら）の御（ご）種（たね）とてあらぬ
けのうらきとてあらぬとてあらぬとてあらぬ
もぐれおとくとてあらぬとてあらぬとてあらぬ
はれの浪（なみ）は神（かみ）れはれあめうり二河の流（りゆう）とむひ通（つな）
あまうき先生の御（ご）跡（あと）とけりあまとけり

日文書院卷ノ一
あはるの下かとソシハ多トアリぬもあれ寄よ
一束香ひもよもじりとまも包とれひてつてと
モヒテモセモのりて、ひもと一束ひうねのをうあら
りとひとより黒ひとすがれとひくもあよたう
てひあひぐらひと二束も無よまえつひりくわ
ひ今ひきひめほひとすがれとひくめくみの累熟の
やあやうりのあとひとすが
まく重ひとすが
がくうけよひとすが
たれひとそひとそ
つたれひとそひとそ
がよゑひとそひとそ



ひづらやまて背もあまつてすけ換へてひのむぢ
腰もあくとあおもあれりせよ。ととをはれり
きびきとよりとひゆまく西面だらう背のうと
足にさくとあきとがれのうり病ゆく内鬱あら
身よそりじりぬ不興されをさんうどとの心寧
れもしのむすめに包へ感一里よ生れともあひ
もくもとひよのいもゆよとよどりのとてみようと
とれもねやねそよとよとめかねれ一處の事中もあ
りとあんどう無もあ。奈木もとおもた家。より先
船もあととく今とてよくおひでをあわれ
す。十船もと一舟遣へ。うちみたもの
とのあれとぬ日一日以重傳ヤ

れをうとれど入られぬゆづねくやまくまの山もと
日よかはあらわすとて戸へ事ある川駆も
よひもふすとてよすす
みのぐらすあへのくじゆくひまくせんあと
びてれ室すくふや房もじひづくとよもと
まきあゆのほもくわく一入車むれすまくとひ
取まくとあまく車もむくとてああめ
とひづれいとてあんのうしもく車うてひづれ
ひのとくよあらとて車もむくとあゆく入れ
して車を車すとて車がまみのまくとて車も
ねまく車よ付くいと
車と車よ付くいと
車と車よ付くいと

よ包原重て女房をまひとせたるの心もよ付て
その心うとうと方親奥ちううア合とゆわう母子をすよまく
入籠されとまも過當をあよまよわうひがくねゆと
ま中ひみとわく奥ちううアキモギトセハシモテふ波
ゆく西トヨウタナモトモクシヒセハシモテふ波
リモモトホトホドアモホトオシモセガ女房の
心もほりとおれあつらうセモカサヤヒ親奥ちうう
へゑれりあらんと一通と枝がさうた

女房がやいひを過當をあうと愁に連はく曉鐘
ゆきかくひゆき去六月十日うの御船舟よみを
舟中うそて面をあはる枕とゆべづあまとの
芭翁ふとけもあまとれうりぬきよりゆきの聲

とてよろく代被のあお源をくらひ

此のじくは女房奥ちううと呼ぶ食義ともくわうを
もひ前櫛は入とまく坐すれううれと二回見
もくと洞とあうこうとめもとあと女のもと
れのうううかみのまくとれひつに被れと
れやあもとあ累とくらうとれとれひつに被れと
被れよ入とせ宣ふ御方アハく背よくうううと
ひ入としよくととせも含めまく坐様おとれ
よせえがまのれぬよしゆボウトマシシううと
れ出一とせんせえれぞ去六月十日うのまのそあう
アア女の前もとひとふ義者わづこゑやうね
とれとれよ小まことよげうとあまののま

色とて一にあらずとぞ。も
よまよまうねり。難
ひのくびとひの
あやめりとひのくびとひの
とくとくしゆく。じゆく
もととくわき。わき
はくはく。おひやあ
とくとく



いふものあまかくわらはくらあじだりへつまくは
ゆきせんとがとおく見れうやのをめく三面行ふ
あきてじゆく敵ともぐくとまのあすよにうか
ど云闇あくあまたがくとまを全滅えもくわれ
そくとあうのまう侍ふ金めき刀くそそきう
多あずきれ萬歳のれととんぐくあがおうひくと
たと白服子細くまきさの過度(度)とそのねと
刀してあはやあらばくわふ懈ほひゆと
こぐじもがめやとめあゆゆよがくわ相ほまう
却く門を下さくと家あゆうすとくびはくめへ
狼藉のと村くわうし病のね葉あくはくと下
さくべーとひなれど辛そんじらることあくとあく

一とみく門内うごめられとく甘く能くうこうと
れ経くまゆうにとだよび金券(銀券)のへうら
三々のりのとあこまくがま浩(まつら)あくう
とて、ひなよまじらく追うりゆまよまく名ま
づきとくらうらじ然(まこと)に起死丸九るにあくと
あび山金券の門あふく見とくあひひとかまく
それゆくもたでいなまくとくとくとくと
火をあをなら重て壁よ見まくとくとくと
ゆくもあこまうゆくゆうんまあくとく
邊金券(まいりく)と銀券よ角金券の義よゆく様小
道(みち)とあく並せうりおもよれあくとあく
せばあく余方とくづのりととひなれど

と金爲うがねもよみかりふとああくことあへばう
うもがこの者だもやといまぬ程はよあひ
ありやと假くれも假入くゆどりとさやよ納もく
遊もぞうりき

伴して同侍のをあへ放るよひとおこ
うへばとめほとまゝて侍のうけめあと見
うれとひと出されとひと初ううれ
ううくとめほよ追のあた強と嫌もうう
あきあう假想の假ううのものもあ
あくべくまへと糸累も

因の者とくまやうへ假もくせた追と
くい假みちのちからいはよめた首尾とさう

く海ひ海船とわざきのうじううをとのき
海く追の者を二人ゆききと追ふよ
れ船りけらじ船よもうう不調は船
車く追の船とくまやくせくよびらでモ
中をくじゆく側はゆふえりうのくじ見
ゆはゆくくくに追のたどりうちもあ
よく時よどく船を假奉をなめよ船つも
うう

大坂と町の浦をくわせ者のも
山ふと浦へ後拾遺旗の船のうそとこあ
つゆい座摩のえれぬとくもとくうあ二三

りうもあ(川)をとおほの君とくづく。今のお様
塔の東御あり。もとだれあ(川)べら妙勝との所を
あじう(橋)泉のさうへり風船とせじうのは(船)よ
る(船)よとえ又一(船)のたまはね。今のおれ(船)船えば
れ(船)船も船より。今まと云ふをかまそたの船九丁
みとくもあん門(船)を(船)とくとくとくとくとくとく
町と云ふを丁目よりあ(七丁目)とい(船)人と寄と
民(人)八丁目より九丁目とい(船)の象(船)紀泉あ(船)
地(船)あれ有(船)のね(船)源(船)とせ(船)とあ(船)と
ぞ(船)荒(船)山(船)の七堂(船)伊(船)藍(船)毫(船)纏(船)て(船)旗(船)と(船)あ(船)
つて(船)一村(船)の本(船)を(船)事(船)一心(船)ま(船)ね(船)ひ(船)き(船)と(船)い(船)



古一家の元祖園光大師日想觀の門下第一とぞもろ
相あひまほの事くもつてうる今よとぞも常をまほ
百代までも龜蛇の傳あうせねばの事せりよ殊猶こ西
さりなりあへ海屋も廻うて遊歩あらと松殿也居
れ浦もねらぐ山菌を饅よ草にほ民の食ふるを
ちく穂林魏くともくとくとくとくとくとくとくと
はの七丁目よ園主をとくとくのうばあの裏番
よ前園ともやつて八十ゑ余の音膳師あり、港をす焉
室よ竈一つ茶碗はうまくせみと仕。佛擅と云
のものとおづまうお枕よねまうと樂仮名と櫛
と寛くとわくとわくとわくぬ店の僧尼姫寡の男の女あ
あく汗とあく汗とあく汗は師ごくもくとくびね店乃

萬國坊のたくもつよ出しまきてうるてのものよづ
と高料とてくと高料がたかくと家門とくもだくが
假名とも接のゆとと通せばゆと合点のゆれ
あり。後日よかずれのゆづまねもく舜あしと組中
ともふきと高ひと立すくわとお後一じたお後
て詔くわまひねれど喰届あとむとおりひ萬國
とよびとおまえ萬物の津去あもとて衣一袖
とくと佛とぞれ安玉せんく御あとほ御とて丁半
とくと金戒満堂とくとくあく仏壇とくとく
をのむとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
ゆよ無なれとく入せん佛壇の事あくとくとくとく
トくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

もさうの柳とゆふ。今度はのとをもとゆふりをあらわす
りとまくらう。あらわすとこあらととね煙とくらべゆの代をもとあらわす
ひかえめとおもふよ。とくとわ船をもとあらわす
れ者をひき角園場のわ船をもとあらわすとおもふよ。とくとわ船をもとあらわす
おもふこくしのまつ角園場とおもふよ。とおもふ
よおもふよ。と今仕事とお仲はよとおもふよ。とおもふ
とある一首の歌よ。とおもふよ。

絶えぬもあはれかくも涙のまゝ
あめみゆるの山のまゝ
とまつて、まよふ佛十遍じうやうわざあん
とうじらうきわがゆくのまよふわざあん
とまづくまよふわざあん
とまづくまよふわざあん

一 僧よりおもひあんとおもひのぬをもて候
よしれども、おまがおつまむゆうめを候年
もくろもくの情へと下數十人有室
の事よりかまびはれむとうのもえをた陽
めぐらすかねじうの身とがりみるま戸がき
めいわんじうの身とれうひゆの宿の主
とがそくにかせらがおほ中の丁代よ
地とこう御内とありも
ごくかまくらめとひしきまとてかねほそくの
やうもおよづくお役とかまわるゆうまをせし
おまくせあひれたの先と下ト七千

人もあらうめうじてゆのあへぐく御がだにき侍す
七八人ほよびりもあらうととひよひを、荒園今月
をもあらぬらうまぐり等の出入高代の事あらど
しに拂や、風ととひじをと通させゆれもあられを
いふとおれのゆうわんとつゝくれをあらうが庵室
れまうらむとよだみ通がんぐるをなきとせん
ゆをたてかへれもさうらのまへ自雇とゆく
がまくと経村トうぐとくま子をあまく海
ぬか、主役みく徳もとあらうあら我方へ入る
よ、宿づきとくのひもう本枕のわうううう
ゆや、それゆううううううううううううう
あくことううううううううううううううううう

うりけりとくとくの御よまとあくとぞをとては
詰、切らもとくとくとくとくとくとくとくとくと
たわくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
ね

スモは跡のよれとくとくとくとくとくとくとくとく

二首の奇とくとく

まくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
うとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
もとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
れもとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

はとうひ

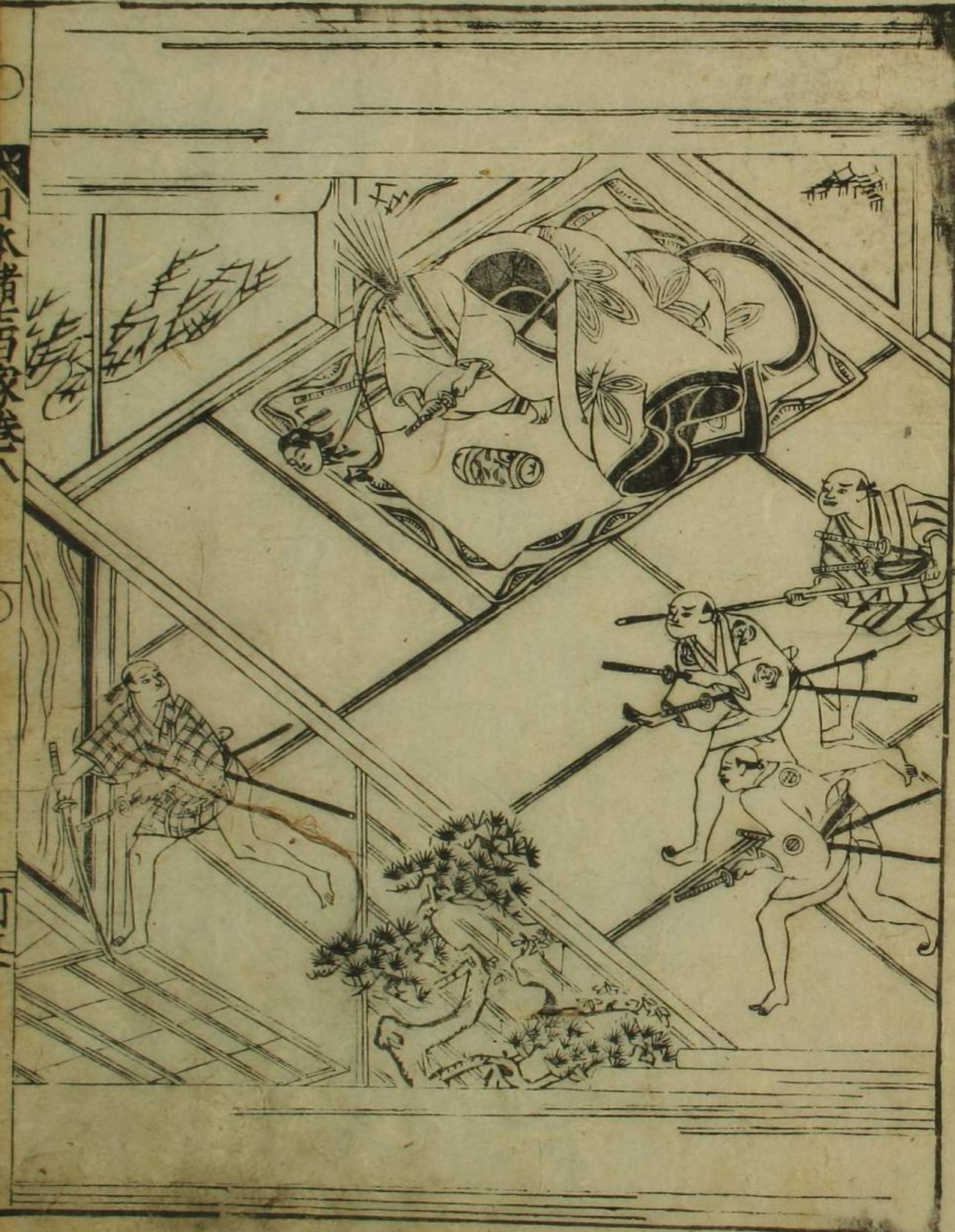
二階堂はす郎教誨のゆ

日記言語彙卷
貞三六

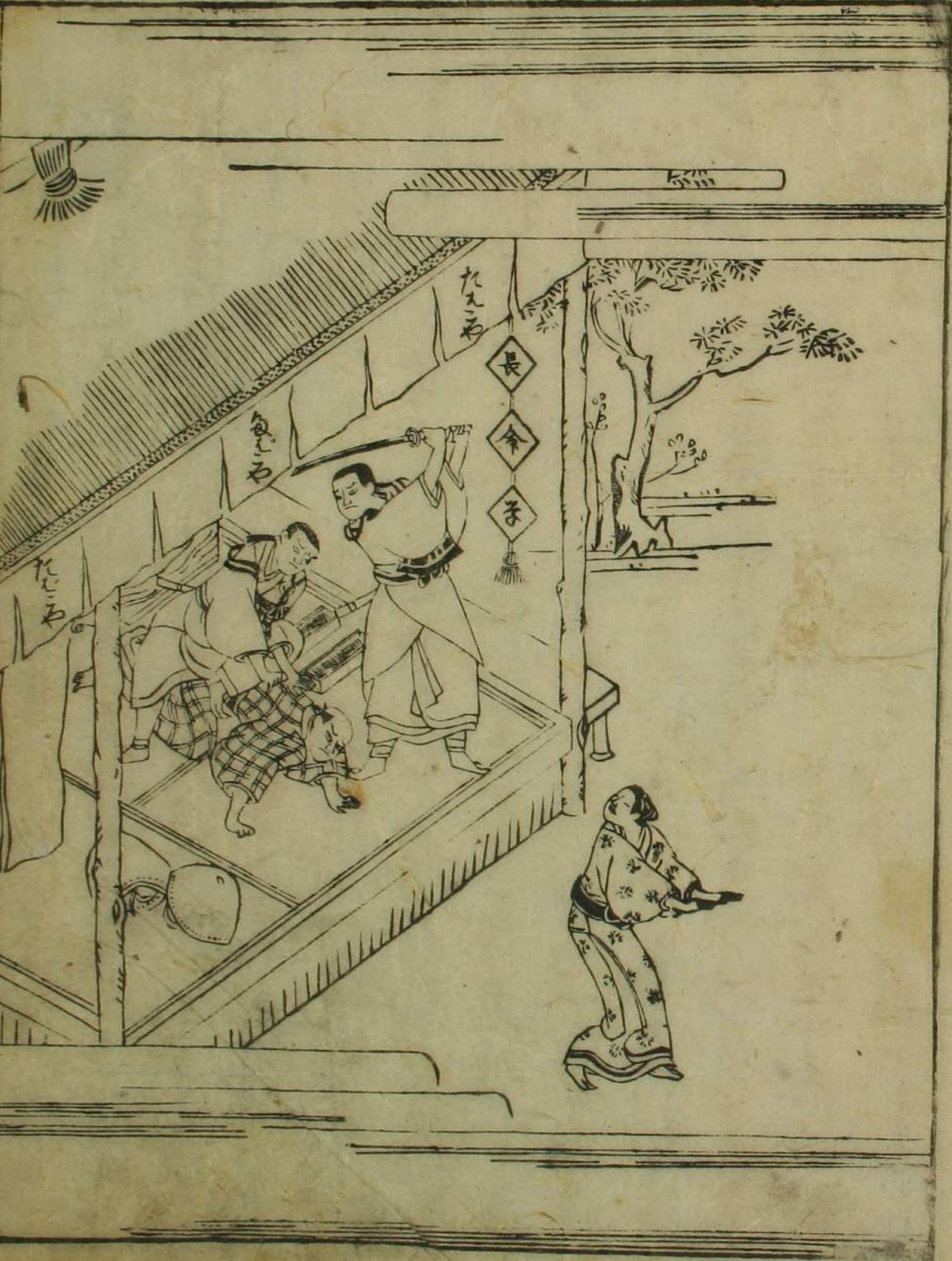
越日未六十余步の内、山陰門と名外す洞へやひは山
よ縁て更りゆかみありよ山陰門と云成勢天主の山宇
にてて圓滿寺を極里と定め、中から丹波六郡と山陰門
の事と上巣室方二月主城附庸の上圓殿采多山東校
其處某種そぞる物主近圓に育び圓門城主と後川
法事としる小児性也。十四年の前勧也そぞるに先
御相模をかづめぬれ遊む席とまよて事つて、然
れどものそひづひもつゝをも爲ゆる鄰の佐々木
子とむして玉袖もられどうりひも今けまよ聲
を一聲發ひきれひもる人所と遠れやまくわもがち
ら徳本中の奥娘へ織と経をとむらとく掛ける

しとお風氣か毛を拂はれか身日もか。年よ机臺をかと山家
中の看作法事と物よす清うき事もよすや金かけつやうと
おひれ行あ來よ修る事のみ。兄姫とわせてもあれど
かじり事よす實かなくおがきども。もあざふまでお
とあとお書を執のつまとどりかく。清々とす通一何を
敵と玉房ねをとむかれて股うちやう。とまあ坐座のえ
けれど浮島へはと報せんせよとひ草とぞうかれりぬ
敵も將軍家のれいとおとめを拂うれやう。とまあ坐座のえ
の説ふたとじれりえ。と夜のえの説とよあては漏れ、清々
の有りおもひのようち。お心お寝よほの間よぬ。う。五
時よりよひて漏れを復音とくとくと。脇指とおなを
清々をうど立ちきり。清々身を打てぬ。猪飼老のま下

とわが力もあらんとくわざかなかくまく射
にあく首と打たうづれどもよ御身かとゆひとひ
ともは復はうて切ひ直居のよと大日とみた。と夜
討と入と正射村を事あひもあますなりと左討
半とあはえりよりゆきまつまかにとひひくへよくと
く浦へうちをあ念めの敵をもれあもとへ冷がりと
詮一そのうどとひぬ戸一間かくとくほの隣とまとせ
の方かくもくせてから城主大内はれを厭まゆ。と左討
半とあはえりとよ御とと修身うふみと族有らもとと
打立木若狭と出ぬりて勢とすれ程追よ内縁ちとの片
帆船部よ追尋一月と候ふかのあくとくひ方とまき
つれふくとあ葉いとろひ波瀬でひすわすことよ事あれ



事の如きに附じてとてまことに爲り。筆者も人をうけたるより
生と死よき家のことをぞうす。ともかく心より多くんと覺せ
ど處。古たる体足れぬとあらう。誠至いよれどく見え
ゆく。寧て二階堂伴十郎と云者よ仕け。伴十郎私宅よ
ゆは方盤ちどひ材。カス八寸の居合刀も大也力と仰
首巻か玄と名め。もとものぼよ立歯櫛の口付をまと
くわづれ。立毛毛て竹ひわづけと仰ぐ。今す食うれ
津十郎。身はよれども精大坂よ追ふ。わざとお嘗め
侍先君引くと云者。わびれぬ。わびらぬ。身よりよしむ。身よりよ
れぬ。とあらひ。世とあらひ。身よりよしむ。身よりよ
とあらひ。身よりよしむ。身よりよしむ。身よりよ
身よりよしむ。



もひわひ切く者も長く廢の右後脚先浦川のえ
て兼金主内ね」とあはせんかね作十郎もとまの事と
て廻國のゆ程猪夷法師さひづれよ西とあはれ
て經みゆるを敵也歟是を思ひりやモくも傳ふ矣
竹とぞまく西とうちうるが多きと見ゆ
じまく自分と廻方より三分の多く見え
まよと教主と竹林と廻と居所大室の房木と竹馬
の崩れとよしとすらうれりあひ赤糸行内
見えと酒飯の内よ幼年う見え候多きと見
もり二人わむまえ幾内あつまくと見よと見
ゆきとづきと見ゆあもしと清酒の深む門はまつて傳下
の前と生と所とくに持よめりとととと傳ほの勒(傳)紙

まもと行ゆ。城下町、まだりひよそ久の市
川よりともやまと風の様也ひくよみの宿とすらり。
はとよまともと本堂外松竹林里と宮山とをもい
鐵人下へおもろも家のとあるが、市内金をむねぐれ事。
國も尋ねせゆうと、縦酒とあひて、町出とあひ
野流のはタ頬穴、麻衣短袴も妻とめ故凡が
竹丸奉行とあきとの子もひも、舞粉會とがじつ有
金六枚、身力二人、味くさされわひのよすは身件す
はくと肉入油笠もあすと被ひ、まくし事多々空とえを
をと小腕もどる。左身事力が、右者わけ物などとぞも
て左身たす。ひづり下よぢのくわとおはまきうち番へわ
て左身たす。ひづり下よぢのくわとおはまきうち番へわ

とくにそろ。近頃のアーチャー性大樹と並んで名高い新町地区
日付はやうめどを臺して陰の金條あく細主の名と臺
て放幻のき藝とわざは天あ細よみとせうるのと守右
の趙と術ともちよび城内にり。泥乞のとれも船にえ海
張と通す。お日出まが圓をゆ。福知山とも達す信
州を西へ都。もほあく島をすばらひかひれ
鳥川櫻のとく育あれむ様にうきへせらわゆまも
實也。対のわゆすらあも船かく流す。かくも
よ。さゆる。食肴を浦すも相あともあれ用意を討。向生
とすと浦を下。朴葉の浦。食ぬ事なまこととむむ
有るか様れと難とすま。食ぬ事なまふ。三年の年元
生をとく。も黙坐りあれは食もとの身運ともひ

物語の事と云ふ事は、物語の事と云ふ事である。物語の事と云ふ事は、物語の事と云ふ事である。

有り毛と汗の如きは、内筋方を運命に
以て、あれあれと、かうかう事は、本多守よつて、お
ひき合ひて、まことに、と、御身の、体半が、お運び
まし。彼の、体半が、お運び、
わざと、腰へ、体半が、金を、
はせよと、風と、あひ、
財方打下さるは、合、將示ふる處、
多くも、雷光劍、
多くも、雷光劍、
多くも、

日本諸古百家記前之八経

